

Tomoko lida 飯田朋子

学習者の実情に沿った授業スケジュール作成 —授業実施における対応および結果—

Prethodno priopćenje

Preliminary communication

UDK 37.091.214:811.521

<https://doi.org/10.32728/tab.16.2019.4>

要旨

プーラ大学日本語・日本文化学科(以下、本学科)の目的の一つに、学習者の日本語運用能力の向上が挙げられる。そのための指標として、学習者の単位取得率を増加させることが授業における目標の一つとなっている。本学科では、限られた時間とスタッフの中で、3年間の総括的目標であるCEFR/B2をできるだけ多くの学生がクリアするために効率のよい授業運営をすることが求められる。本論は、全体的な進度の調整を目的として、具体的な授業スケジュールを作成・実施した結果について、特に理解度の不足により変更を余儀なくされた時の対応と結果について考察したものである。

キーワード: 言語教育 コースデザイン カリキュラム スケジュール シラバス

1. 背景

本学科はクロアチア初の学位取得可能な日本語学科であり、2017/18年度である本年度で設立3年目となる。本学科ではシラバスに基づきながら、学習者の理解度に合わせたフレキシブルなスケジュール管理を行っている。また、より学習者の実情に沿った教育を行うべく、試行錯誤を続けている。

2. スケジュール作成と運用

2.1 基本となるシラバス概要

本学科において、基本となる日本語授業はJapanski jezik (以下、JJ)とGovorne vježbe (以下、GV)で構成される。3年間で使用する教科書は、現行で、「みんなの日本語初級I」、「みんなの日本語初級II」、「みんなの日本語中級」、「上級へのとびら」の4冊である。1コマを90分として、一年次及び二年次は週JJ2コマ、GV2コマの計週4コマ。三年次は週JJ2コマ、GV1コマの計3コマが行われる。

JJの役割は、文法知識を深めることを基本とし、作文や読解など、各分野における日本語能力を向上させることである。GVの役割は主に会話能力の向上にあり、日本人スタッフが中心となって、学習者に生きた日本語を教授している。

2.2 スケジュール作成時の留意点

JJとGVは個別に運営される授業ではなく、JJの次の時間にその内容を踏襲したGV、そして次のJJといったように、内容的にも時間的にも連動している。これらの授業は複数の教師で担当される。このシステム上、授業スケジュールには、各教師が担当する個所を明確に記載しなければならない。教師同士で担当個所に混乱が起らないよう、正確で明快なスケジュールの作成が求められるためである。

しかし、精緻なスケジュール作製を行ったとしても、それが学習者たちの実情に即していなければ意味はない。よって、授業が進む中で、学習者の能力や状況に応じた柔軟な対応が求められる。従って、明確なスケジュールを立てなければならない一方で、スケジュールは柔軟性を持ったものでなければならない。須藤(2016)は、Dudley-Evans and St. John(1998)の論を用いて“fixed course”と“flexible negotiated course”を論じ、『固定されたコース』と『柔軟に調整されるコース』について述べている。須藤(2016)によれば、『固定されたコース』ではコース実施時にシラバスが作成され、このコースにおいては、シラバスは事前に作られた計画から逸脱することはまれである。一方で、『柔軟に調整されるコース』では学習者の反応に基づいてコース内の様々な要素を変更する余地を残しているとしている。本学科では学習者の理解度に即したフレキシブルな進行を目的としているため、『柔軟に調整されるコース』が主体となるが、前述した通り、内容的にも時間的にも連動している本学科のシステム上、『固定されたコース』の要素が必要である。

次に、2016/17年度の冬学期に実施されたアンケートを見ていきたい。アンケートにおいて、以下の質問が成されている。以下は実際のアンケートの内容通りに表記しているため、2カ国語が併記してある。

What kind of request do you have in relation to lessons of Japanese language and culture course? 日本語・日本文化学科の授業に対して、どのような要望がありますか。

I would like that the Japanese language lessons are done with the same pace as now.

今のようなペースで授業を行ってほしい。

I would like that the Japanese language lessons are done more slowly. もう少しゆっくりとしたペースで授業を行ってほしい。

I would like that the Japanese language lessons are done more quickly. もう少し速いペースで授業を行ってほしい。

この質問には、2016/17年度の一年生44人および二年生6人の合計50人から回答が得られた。結果は以下表1の通りである。

表1 2016/17年度冬学期 進捗アンケート結果

	今のまま が良い	もう少しゆ っくりした 方が良い	もう少し 速い方が 良い	無効	合計
一年生	22	16	0	6	44
二年生	1	5	0	0	6
合計	23	21	0	6	50

表1より、授業の進捗が速いと感じている学習者が全体では半数、一年生では4割存在することがわかる。「もう少し速い方が良い」と答えている学習者はおらず、全体的に見ると学習者は授業進捗が適当、もしくは速いと認識していることが読み取れる。

以上の結果から、学習者の単位取得率を上昇させるためには、授業の進捗についていけない中下層の学習者に焦点を当て、学力の推進をはかるべきであると考え。よって、従来よりも進捗を落とす変更を行い、また復習の時間をあらかじめ各所に設けた。具体例としては、一年生の『みんなの日本語初級』は、2016/17年度の進捗は1週間に2課とされていたが、これを2週間に3課に減速し、2週間目の後半を復習の時間とした。加えて、あらかじめ予備週として、半期に1週間の復習期間を取った。これにより、理解が遅れがちな学習者の理解を促進し、固定されたスケジュールの中でも、ある程度柔軟な調整を挟む余地を残した。

2.3 理解度の把握

学習者の理解度を把握するための管理システムを学科で設けた。主なものは、授業報告の作成、毎週の学科会議での進捗確認、定期的な小テスト、アンケートの実施である。これらにおいて何かしらの問題が持ち上がった場合は、柔軟にスケジュールの変更を行う。

授業報告作成の目的は、授業後に必ず授業担当者が授業報告を記して引き継ぎ要件があれば共有することにより、授業中に問題が起きた場合でも次の担当者にそれを伝え、相互にフォローしあう体制を整えることである。毎週の学科会議の目的は、教師同士の意見・情報交換を活発に行うことである。学習者の理解度や授業の進行状況を細やかに共有し、話し合うことで、適切なスケジュールの進行や改変を行うことができる。また、スケジュールの変更がある場合に、担当者全員にその場で周知することができ、無用の混乱を避けることができる。もちろん、これは学期開始前に作成したスケジュールを、学期途中で変更できるという前提に立っている。小テストは、継続的に行うことで学習者のモチベーションを高く保つことが出来る上に、学習者の理解度を点数として計ることができる。これらに加えてアンケートを行うこと

で、学習者の理解度をより精緻に把握することができる。アンケートは学期の終わりに必ず行い、次年度の授業をより良いものにするための指針として
いる。また、必要な場合は、学期の途中にも適宜アンケートを行っている。

3. スケジュール変更の原因及びその対応

スケジュール変更例として本年度、つまり2017/18年度の一年生冬学期を取り
上げ、変更の原因及びその対応を述べる。

前述の通り、セメスター開始前に作成したスケジュール第1版では、『みんなの日本語初級Ⅰ』、『みんなの日本語Ⅱ』の1～50課が2週間で3課進むことが決定された。よって、1年30週間（28週間＋復習として予備2週）で「みんなの日本語初級」が42課まで進む予定となった。冬学期は、15週間（14週間＋復習として予備1週）で21課まで進む予定であった。

表2は冬学期一年生のスケジュールの第1版、第2版、最終版の比較である。

表2 冬学期一年生スケジュール

	第1版	第2版	最終版
第1週:10/02～10/06	オリエンテーション・1課	オリエンテーション・1課	オリエンテーション・1課
第2週:10/09～10/13	2課・3課、小テスト	2課・3課、小テスト	2課・3課、小テスト
第3週:10/16～10/20	4課・5課	4課・5課	4課・5課
第4週:10/23～10/27	6課・復習、小テスト	6課・復習、小テスト	6課・復習、小テスト
第5週:10/30～11/3	復習週(予備週) 6課までの復習、ひらがな・カタカナの復習	復習週(予備週) 6課までの復習、ひらがな・カタカナの復習	復習(予備週)> 6課までの復習、ひらがな・カタカナの復習
第6週:11/06～11/10	7課・8課	7課・8課	7課・8課
第7週:11/13～11/17	9課・復習、小テスト	9課・復習、小テスト	9課・復習、小テスト
第8週:11/20～11/24	10課・11課	10課・11課	10課・11課
第9週:11/27～12/01	12課・復習、 中間テスト	12課・復習	12課・復習
第10週:12/04～12/08	13課・14課	復習週、中間テスト	復習週、中間テスト
第11週:12/11～12/15	15課・復習、小テスト	13課・14課	13課・14課
第12週:12/18～12/22	16課・17課	15課・復習、小テスト	15課・復習、小テスト
第13週:01/08～01/12	18課・復習、小テスト	16課・17課	16課・17課
第14週:01/15～01/19	19課・20課	18課・19課	18課・復習
第15週:01/22～01/26	21課・復習、 中間テスト	復習、中間テスト	復習、中間テスト

最初のスケジュールの変更が起きたのは第9週である。半期に2度予定されている中間テストの一回目が12月1日に予定されていたが、第9週の学科会議で、小テストの結果が芳しくなく、学習者の理解が十分でないことが議題として取り上げられた。会議の結果、中間テストは1週間遅れの12月8日に行われることとなり、第10週は復習を行うこととなった。

以上の決定をふまえて、スケジュール第2版を作成し直した。第1版のスケジュールから1週間の遅れが出たため、2週間に3課の進度では前期で18課まで進むことになる。しかし、当初の21課から3課遅れるのは好ましくないという意見が見られたため、第14週のみ不規則的に2課を導入・練習し、第15週を復習・中間テストとして、前期で19課まで進むことが合意された。

次に変更があったのは1月12日である。第17課を終えた時点で理解の十分でない学習者が多く見られ、復習の必要に迫られた。よって、第19課まで進む予定を第18課までに減らし、その時間を復習にあてることとなった。スケジュール最終版では、上記までの決定を反映している。

よって、2017/18年度の一年生冬学期は、『みんなの日本語初級I』第18課までを終了した。

4. 結果 — JJ1単位取得率比較 —

以上見てきた対応によって、結果として学習者の学力と単位取得率にどのような変化が見られたのかについて述べる。例として、スケジュール対応例として例にとった2017/18年度の一年生冬学期のJJ1の単位取得率を、前年である2016/17年度のJJ1の単位取得率と比較した。本学科のJJの単位を取得するには、必須条件として以下のどちらかを満たす必要がある。

- ① 2度の中間テスト両方に合格する。
- ② 期末テストに合格する。

今回は比較の均一化をはかるために、該当年度に、冬学期末である2月末日までにどちらかの基準を満たしている人数を比較した。具体的には、2度の中間テストに両方合格している学習者と、JJ1実施後の2月に行われた期末テストにおいて合格している学習者の合計を算出した。以下表3が、該当年度2月末時における、JJ1の単位取得状況である。

表3 JJ1単位取得状況

	入学人数	単位取得人数	単位取得率
2016/17年度一年生 (2017/18年度二年生)	51	25	49%
2017/18年度一年生	46	31	67%

2017/18年度において二年生である学習者たちは、2016/17年度の一年生時、該当の期間において51人の入学者数のうち25人がJJ1の単位を取得しており、単位取得率は49%である。2017/18年度の一年生である学習者たちは、46人の入学者のうち31人がJJ1の単位を取得しており、単位取得率は67%である。これは単純な比較であり、総合的な学習者の成績を反映するものではないが、2016/17年度に比べ、2017/18年度のJJ1の単位取得率が上昇していることは明らかである。2017/18年度の授業運営が学習者の単位取得率の増加に繋がったことは確かだと言えるだろう。

5. まとめ

ここまで、本学科におけるスケジュール作成と変更の試みを紹介し、過程と本年度の授業運営による結果を見てきた。このスケジュール作成によって、学習者の日本語能力や、学習者の教育に対する要望が明確化してきた。以降は、スケジュールを管理していく中で浮かび上がった課題をまとめていく。

一つ目に、どの学年でも、教室内での学習者の学力差が大きいことが挙げられる。就学前に日本語を独学または他の教育機関で学習した経験がある学習者も、入学後に初めて日本語に触れる学習者も、入学年度が同じならば全員が同じ授業を受けることになる。本年度の進度変更は、結果的に進度を遅らせることが主となり、また、復習の時間を多く取ることとなった。これは理解度の低い学習者に焦点を当てた結果である。木村 (1982 : 68) は、「到達目標は教科書を何冊終えるかということではない。学習者に最終的にどのような能力を得させようとしているか、それが到達目標である。」としている。本学科には、学習者のニーズや背景を基とする考え方が必要であり、教師陣は教科書や授業時間数の変更も視野に入れていくべきであると考えられる。

二つ目に、クロアチア国内の教師不足が挙げられる。本学科では、学生数に比して慢性的に教師の数が不足しているが、その中でも特に、クロアチア語話者の教師が少ないのが現状である。この学科がクロアチアでの初の学位取得が可能な日本語学科であることから、クロアチア語話者の教師のそもそもの数が少ないためである。スケジュールの調整などに関連して授業形態を見直す案が出ても、クロアチア語話者の教師の不足のために実現できないものが多いのが現状である。JJとGVを連動させて複数の教師で担当する現行のシステムも、限られた教師で助け合い、全ての授業を行うための方策であるとも言える。クロアチア語話者の教師の数を増やすことができれば、各学年に受け持ちの教員を決め、それぞれを独立して運営することも可能だと考える。その場合、授業ごとに、現在よりも学習者の実情に沿った授業運営を行うことができる。教師全員が全ての授業の把握をする必要がなくなれば、全体を網羅するスケジュールを作る必要もなくなるため、よりフレキシブルなスケジュール調整が可能となる。これらのことから、日本語教育に熟達したクロアチア語話者の教師を増やすことは急務であると考えられる。より多くのスタッフが確保できた場合、同学年の中で上級者クラス・普通クラスを作るなど、クラス分けを行うこともでき、より学習者の実状に沿った授業を行うことができる。

以上が授業スケジュール作成と、実施における対応および結果である。2017/18年度の終了時である現在、次年度から新チームでの活動が始まるにあたって、2017/18年度にどのようなスケジュール作成と調整が、どのような意図のもと行われてきたのかを後年に残すことは重要であると考えられる。これまでの試みが本学科の助けとなり、また、以降の実習生の指針となれば幸いである。

参考文献

木村宗男 (1982) 「日本語教育のカリキュラムについて」, 『講座日本語教育』第18分冊, p. 67-77.

須藤拓 (2016) 「学習者に合わせて調整可能なコースデザインを目指して」, 『国際教養大学専門職大学院グローバル・コミュニケーション実戦研究科日本語教育実践領域実習報告論文集』7巻, p. 59-85.

Dudley-Evens, T & St. John, M. (1998). *Developments in English for Specific Purposes*. Cambridge University Press.

SUMMARY

Creating class schedules according to actual learner situations: Responses and results in class implementation

One of the goals of the Japanese Language and Culture study program at the Juraj Dobrila University of Pula is to improve learners' ability to use Japanese. Another goal of this program is to increase student acquisition rates. The three-year study program aims to enable students to achieve the level CEFR/B2. With limited time and staff, the best way to achieve that is through efficient class management. This paper examines the results of creating and implementing concrete lesson schedules, with the aim of adjusting overall progress, in particular the response and results when forced changes have been made due to lack of understanding.

Keywords: language education, course design, curriculum, schedule, syllabus

SAŽETAK

Izrada plana nastave prema stvarnoj situaciji studenata: Reakcija i rezultati u provedbi nastave

Jedan od ciljeva studijskoga programa Japanski jezik i kultura na Sveučilištu Jurja Dobrile u Puli je poboljšati sposobnost studenata da se koriste japanskim jezikom. Jednako tako cilj je ovoga programa povećanje stope usvajanja znanja te povećanje prolaznosti. Završetkom trogodišnjega studijskog programa teži se tome da studenti postignu CEFR/B2 razinu. S ograničenim vremenom i osobljem najbolji način za postizanje toga cilja je učinkovito upravljanje nastavnim planom i programom. Ovaj rad ispituje rezultate izrade i provedbe konkretnih rasporeda sati, s ciljem prilagodbe općega napretka, posebice reakcije studenata i rezultate kada su zbog nedostatka razumijevanja napravljene prisilne promjene.

Ključne riječi: jezično obrazovanje, izrada predavanja, nastavni plan i program, raspored nastave, nastavni plan